

新潮文庫

完全な遊戯

石原慎太郎著



新潮社

完全な遊戯

定価 90 円

新潮文庫

昭和三十五年十月三十日 発行
昭和三十六年九月五日 三刷

著者 石原慎太郎

発行者 佐藤亮一

東京都新宿区矢来町七一

発行所 株式会社 新潮

東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(341) 代表 六七一〇一八〇八番
振替 東京八〇八番 (三九)

著者との了
解により検
印を廃止致
します。

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

◎

印刷・図書印刷株式会社 製本・憲専堂製本所
© Printed in Japan

新潮文庫

完全な遊戯

石原慎太郎著



新潮社版

1440

目 次

完全な遊戯	七
若いい獸	五
乾いた花	三
巻	二
巻	一
巻	七
巻	九
巻	十一
巻	十三
巻	十五
巻	十七
巻	十九
巻	二十一
巻	二十三
巻	二十五
巻	二十七
巻	二十九
巻	三十一
巻	三十三
巻	三十五
巻	三十七
巻	三十九
巻	四十
巻	四十一
巻	四十二
巻	四十三
巻	四十四
巻	四十五
巻	四十六
巻	四十七
巻	四十八
巻	四十九
巻	五十
巻	五十一
巻	五十二
巻	五十三
巻	五十四
巻	五十五
巻	五十六
巻	五十七
巻	五十八
巻	五十九
巻	六十
巻	六十一
巻	六十二
巻	六十三
巻	六十四
巻	六十五
巻	六十六
巻	六十七
巻	六十八
巻	六十九
巻	七十
巻	七十一
巻	七十二
巻	七十三
巻	七十四
巻	七十五
巻	七十六
巻	七十七
巻	七十八
巻	七十九
巻	八十
巻	八十一
巻	八十二
巻	八十三
巻	八十四
巻	八十五
巻	八十六
巻	八十七
巻	八十八
巻	八十九
巻	九十
巻	九十一
巻	九十二
巻	九十三
巻	九十四
巻	九十五
巻	九十六
巻	九十七
巻	九十八
巻	九十九
巻	一百
巻	一百零一
巻	一百零二
巻	一百零三
巻	一百零四
巻	一百零五
巻	一百零六
巻	一百零七
巻	一百零八
巻	一百零九
巻	一百一十
巻	一百一十一
巻	一百一十二
巻	一百一十三
巻	一百一十四
巻	一百一十五
巻	一百一十六
巻	一百一十七
巻	一百一十八
巻	一百一十九
巻	一百二十
巻	一百二十一
巻	一百二十二
巻	一百二十三
巻	一百二十四
巻	一百二十五
巻	一百二十六
巻	一百二十七
巻	一百二十八
巻	一百二十九
巻	一百三十
巻	一百三十一
巻	一百三十二
巻	一百三十三
巻	一百三十四
巻	一百三十五
巻	一百三十六
巻	一百三十七
巻	一百三十八
巻	一百三十九
巻	一百四十
巻	一百四十一
巻	一百四十二
巻	一百四十三
巻	一百四十四
巻	一百四十五
巻	一百四十六
巻	一百四十七
巻	一百四十八
巻	一百四十九
巻	一百五十
巻	一百五十一
巻	一百五十二
巻	一百五十三
巻	一百五十四
巻	一百五十五
巻	一百五十六
巻	一百五十七
巻	一百五十八
巻	一百五十九
巻	一百六十
巻	一百六十一
巻	一百六十二
巻	一百六十三
巻	一百六十四
巻	一百六十五
巻	一百六十六
巻	一百六十七
巻	一百六十八
巻	一百六十九
巻	一百七十
巻	一百七十一
巻	一百七十二
巻	一百七十三
巻	一百七十四
巻	一百七十五
巻	一百七十六
巻	一百七十七
巻	一百七十八
巻	一百七十九
巻	一百八十
巻	一百八十一
巻	一百八十二
巻	一百八十三
巻	一百八十四
巻	一百八十五
巻	一百八十六
巻	一百八十七
巻	一百八十八
巻	一百八十九
巻	一百九十
巻	一百九十一
巻	一百九十二
巻	一百九十三
巻	一百九十四
巻	一百九十五
巻	一百九十六
巻	一百九十七
巻	一百九十八
巻	一百九十九
巻	二百
解説	一
江 藤 淳	二
ファンキー・ジャンプ	三
巻	四
巻	五
巻	六
巻	七
巻	八
巻	九
巻	十
巻	十一
巻	十二
巻	十三
巻	十四
巻	十五
巻	十六
巻	十七
巻	十八
巻	十九
巻	二十
巻	二十一
巻	二十二
巻	二十三
巻	二十四
巻	二十五
巻	二十六
巻	二十七
巻	二十八
巻	二十九
巻	三十
巻	三十一
巻	三十二
巻	三十三
巻	三十四
巻	三十五
巻	三十六
巻	三十七
巻	三十八
巻	三十九
巻	四十
巻	四十一
巻	四十二
巻	四十三
巻	四十四
巻	四十五
巻	四十六
巻	四十七
巻	四十八
巻	四十九
巻	五十
巻	五十一
巻	五十二
巻	五十三
巻	五十四
巻	五十五
巻	五十六
巻	五十七
巻	五十八
巻	五十九
巻	六十
巻	六十一
巻	六十二
巻	六十三
巻	六十四
巻	六十五
巻	六十六
巻	六十七
巻	六十八
巻	六十九
巻	七十
巻	七十一
巻	七十二
巻	七十三
巻	七十四
巻	七十五
巻	七十六
巻	七十七
巻	七十八
巻	七十九
巻	八十
巻	八十一
巻	八十二
巻	八十三
巻	八十四
巻	八十五
巻	八十六
巻	八十七
巻	八十八
巻	八十九
巻	九十
巻	九十一
巻	九十二
巻	九十三
巻	九十四
巻	九十五
巻	九十六
巻	九十七
巻	九十八
巻	九十九
巻	一百

完
全
な
遊
戯

完全な遊戯

フロントグラスがいつの間にかまた薄く曇り始めた。

「雨か、また」

「ワイパーを入れようか」

「ああ」

小さな音をたててワイパーが動き出すと、窓にとまつた霧のように小さい雨の粒子の被幕が筋を引いて左右に流れ出す。

「おっ」

言つて素早くハンドルを切つたが車は道に開いた穴へ大きな衝撃で落ちて過ぎた。

「やくざな道路奴！ 必ずどこかに穴がありやがる」

「そもそも飛ばすことあないぜ、夜は長えや」

助手席でワイパーの速度を調節しながら武井が言つた。

「今夜のお前あ確かについていなかつたせ。持ち札が二点で二度コールして、二度とも奴がゼロまで切りやがつた。が、ヤケで飛ばすのあ止めてくれよ。俺あ未だお前の道連れにやなりたくねえからな。まああきらめろ、勝負のつきにあ波があるってことよ」

「馬鹿言え、あんなブリッジなんぞ氣にもしてねえよ。俺あ早く帰つて寝たいんだ」

夜の街道にはもう他に車の影がなかつた。

道路工事を示す赤いランプがせまつて来る。

「ちえつ、またかい」

言いながら礼次は速度を落し車を逆の側に寄せて行つた。

雨足が強くなつたか、減速した車の外で辺りに降る雨の音が聞こえている。
道は工事のために五十米近く掘り起され、起された土やセメントの破片で車は幾度も激しく揺
れた。

工事場を過ぎるとカーブした道の両側に松並木が続き出す。僅かの間に雨はますます激しく
なつた。

人気のない道のかたわらに、俺を一杯積んだりヤカーが置きつ放しにされている。

「盗まれやしねえのか」

「ここらでそんな酔狂もいまい」

松林を過ぎ、橋を渡つたものとのバスストップの小さな待合所の前に、女が一人立つていた。
正面からライトに照らされながら、車をバスでないと認めると女はさして黄色い雨傘を光
をさえぎるように前へかざした。

車は減速して女の前を過ぎた。水色レインコートに白いハンドバッグと小さな風呂敷包みを下

げている。顔は良く見えない。

「今時もうバスはありやしないぜ」

振り返りながら武井が礼次に言う。

「時間表が出てねえ訳がないんだがなあ。いつまでああやつて立つてやがるつもりなんだろう」

「捨つてつてやるか」

「止せ止せ、方角が違つたら面倒だぜ。お前、自分で睡たいって言つてたじやないか」

が前を過ぎながら減速したままの車を急に礼次は止めると、バックギアへ入れ直した。

戻つて来た車を女は傘を上げて怪訝そうに見守つてゐる。
車を前へつけると、窓からおり出し、

「バスあもうとつくにないぜ」

礼次は言つた。

ゆつくり領き返すと、

「こまつたわ」

何だか、唄うような言い方で女は言つた。

耳元で真珠のイヤリングがゆつくり揺れる。身につけているものは悪くなかった。一寸まぐれた唇を薄く開いたまま、女は待つてゐるバスの来る方をぼんやりいつまでも眺めている。目の切れ長な色白の女だった。二人は同じように、開いたままのレインコートの間の女の胸元を眺めて

いる。

「一体こんな時間、近くに人家もないこの辺で、女が今まで何をしていたのか見当がつかない。
「こまつたわ」

女はもう一度、唄うような口調で言つた。

「バスはもう朝まで来ないぜ」

言つた礼次を、女は黙つて無表情に見返すと、突然にっこり笑つてこつくりする。

「何処まで行くの」

訊いた武井へ、

「横浜」鈍く、投げ出すように女は言う。

「何処?」

「藤沢の駅までいって、汽車で——」

「汽車だって、まだあるかな。危いもんだ」と礼次がドアを開けて言つた。

「お乗んなさい、駅まで送つて上げる」

女はおびえたよう長く彼の唇を見つめていたが、急にまた笑うとゆつくり頷いた。

「一寸待つた、武井、お前、後に乗れよ」

「何故だ?」

「何故でもよ。わからねえ奴だ。いただきだよ、これあうながすように低い声で言つた。

「おつ」

指をはじいで、

「了解、了解」

素速く身をすらし外へ出ると、ドアのノブに手をかけ身をかがめ、からかうように丁寧に、「どうぞ、お送りしますよ」

ゆっくり傘をたたむ女を二人は挟むようにして見つめている。

ギアを入れる礼次へ武井が軽く、

「何処で？」

「え」

訊き返す女へ、

「いや、一寸。貴女じやないの。え、おい？」

「まかしとけよ」

言つて、ふと女を横から見やつたが、彼女は何故か放心したような表情で前を向いた切りだつた。ライトの反射を受けて白く浮んだ横顔を見ながら、礼次は首を振り短く口笛を鳴らした。

「横浜には、家があるの」

「え」

「家がさ」

「ええ、横浜に行こうとしてたのよ」

答えにならぬ曖昧な女の言い方だつた。

それ切り暫く三人が黙つた。

肘で器用にハンドルを支えながら両掌で煙草をつけてくわえると、女にも、

「吸うかい？」

女は座席の上で体を動かし、向き直ると礼次を横からおずおず、がじいっと眺めている。

「え？ 煙草だよ」

「いらないわ」ゆっくり首を振つて女は言う。

「どうかしたのかい君、変じやないか。そんな固くななくて良いぜ、どうせ道順なんだ」
が、女はまた向き直り、同じように首を振ると言つた。

「私、変じやないわ、もう」

「もう？」

が女は黙つた切りだつた。

また松林が続き、それを過ぎると右手は背の低い松の繁みに遮られた向うに海岸の荒い草地が続いている。

「来た見てえだな、武井」

一人でつぶやくように礼次が言つた。

「そうかね——。らしいや」

新しい同乗者にかまわぬように、武井が答える。

「え」

女が言つた瞬間、礼次は右へ一杯にハンドルを切つたのだ。車は濡れたタイヤをきしませ右手の低い繁みの間を縫つて草地の中へ入り込んだ。

低い叫び声を上げながら、はずみで女の体が投げ出されたよう右へ崩れた。立ち直る暇を与えず礼次がその上からのしかかり、後のシートから武井が動かすまいとその両掌を捕えた。

瞬間、ひつと言うような低い悲鳴で女は体中であがいた。女と思えぬ猛々しい程の勢だった。握つた手を振りほどかれた拍子に、武井は手の甲をドアの端にいやという程叩きつけられたのだ。

「この野郎！」

言つて頭を押えつけるその掌の下で、女は何か訳のわからぬことを叫んだ。

「叫べよ！　が誰も来やしないぜ」

着たものをたくし上げながら礼次が言い返した。

女は尚叫んで身をよじつた。

「黙らねえか、良い加減に！」

シートの背から殆ど全身を逆さにのり出した武井が、叫びながら女の眼の辺りを上から力一杯殴りつけた。女はそれでも叫んだ。が何故か突然、失神でもしたかのように女は温和しくなる。「よしよし、なまじ言うことをきかないでいるよりそうしてりや顔も腫らさずすむんだ」女はそれ切り動こうとはせず、なすがままだつた。

同じ姿勢のままで礼次が言つた。

「おい、ヘッドライトを消しといてくれ。バッテリーが上つちまうからな」

武井が後から手を延ばしてスイッチを切り、それ切り辺りは真暗だつた。近くで渚に打つ波の音が聞こえて来る。雨の音は先刻より軽くなつたようだつた。

「変るぜ」礼次が言つた。

「よしおさえててくれろ」

「大丈夫、動きやしねえよ」

先刻から女は低い声で何か聞きとれぬことを言いながらじつとしたきりだつた。

暗闇の中で、二人が前と後のシートへ入れ替つた。

煙草をつけると途中で礼次は武井に渡した。

「吸うか?」武井が女に言つた。

仰向けに倒れたまま、女が首を振るのが気配でわかつた。

また雨が降り出し、強く車の屋根を叩いている。その中の暗闇で礼次がつけた二本目の煙草の